

求められる臨床検査技師

内田 真由美

社会医療法人 泉和会 千代田病院 臨床検査部

【はじめに】

私が管理職になって 5 年になる。入職して、30 年の月日が流れ、当院の検査部も大きく変化した。2 人だった検査技師が現在は 8 名と増え、平均年齢も若くなった。

入職してからずっと検査部の開拓を心がけてきたものの、これからの病院にとって、どんな検査部を作っていけばよいのか、いつも自問自答している自分に検査部スタッフへの期待と、自分への不安が交差する。

日向市の小さな病院が県北の医療を担う中核病院へ発展し、医療の向上とともに、医療スタッフの質も高いものを求められる。そこに属する臨床検査技師も他職種との連携や検体採取、検査結果説明と患者との関わりが増え、専門的知識や技術の向上・患者接遇が求められる。

では、臨床検査技師の質とはどうあるべきものなのか、何を求められるのかを考える。

【臨床検査技師の質・コミュニケーション】

当検査部に入職すると、新卒で入ってきた場合は、4～5ヶ月で心エコーを除いて全てのセクションをローテーションして、5～6ヶ月目から時間外待機に加わる。中途採用の場合は、3ヶ月ほどで、ローテーションし、4ヶ月目から待機に加わる。

臨床検査技師の仕事の習得には、個人差は多少あってもすぐに習得できるが、病院のシステムや部門間の連携については、ある程度の期間を要する。同じ臨床検査の仕事をするにしても、病院ごとに、検査機器やシステム、約束事、決め事は違うものである。

組織の中で検査部として、機能する事はどういうことなのか、そこを押さえておかなければならない。

「自分たちの仕事だけ、やっていればいい」という、無感心な者は、どこの部署からも相手にされない。しかし、組織の中の検査部として動こうと

する者は、誰の目にも認められ、信頼を得ることができる。今、病院には自分たちの知識や能力を存分にアピールできる場面がいくらかもある。アピールの手段は、知識・技術のほかにコミュニケーションである。

コミュニケーションも、相手を思いやり、円滑なものでなければならない。コミュニケーションのできない者は、相手に不愉快な思いをさせたり、内容が伝わらず、誤った解釈で受け取られる。しかし、コミュニケーションは誰もが、上手くできるものではない。

【臨床検査技師の質・専門的意識・技術向上】

検査部には、昔から医師がよく訪れていた。検査項目についての質疑応答、検査結果の問い合わせが多くあった。遠い存在だと思っていた医師が身近に感じられ、誰もが、親しみをもてる検査室にしたいと思った。

ある時、医局会で、臨床検査技師が細菌検査のグラム染色について医師に研修した時に、医師が「検査のことは、君たち検査技師のほうが専門だから、自信を持ちなさい」と言った言葉を忘れることができない。その言葉に勇気づけられ自信にもなった。

現在、異常データやパニック値の検査結果は、医師に直接、電話で報告している。時には、医師から、追加項目のことや、病状から考えられる事の問い合わせも受けている。しかし、対応できるのは、全ての臨床検査技師ではない。今後、医師の診断をサポートする臨床検査学的視点からの病態解析情報を提供できる検査部をつくり、そうなることで検査部の存在の価値と信頼を得ることができる。また、スタッフのやる気度が増し、さらなるスキルアップにつながると考える。

【臨床検査技師の質・これからの展望】

「 検査結果説明のできる検査技師 」の前進として、輸血療法委員会の臨床検査技師が輸血後検査の結果説明を行うことが、決まっており、今後、臨床検査技師として、医療の現場で活かせる場を模索しながら、組織の中での存在感を出していきたい。

職員が認定資格取得を目指し、より専門的な情報を他職種へ助言・提言を行えるサポート役としてチーム医療に積極的に参加し、また地域医療の参画、研修会の参加や学会での発表と充実した、求められる検査部を期待したい。